1歳6か月児をもつ親の育児ストレス(1)

―母親の育児ストレスと関連要因―

桑　名　佳代子*
細　川　　徹**

1歳6か月児をもつ346名の母親を対象に、育児ストレスとその関連要因について質問紙調査を行い、200名分（回収率57.8％）を分析した。育児ストレスは、日本版 Parenting Stress Index により測定した。1）育児ストレス総点は、児の性別と出生順位が関連し、女児より男児の母親、また第2子以降に比して第1子の母親が有意に高値を示した。2）「親自身に関わるストレス」を従属変数とした逐次重回帰分析では、ストレスが高得点であることには、母親役割の消極的・否定的受容が最も強く関連し、次いで夫の育児への関わりに対する不満、母親役割イメージと自己とが一致しないこと、第1子であることであった。3）「子どもの特徴に関わるストレス」を従属変数とした逐次重回帰分析では、ストレスが高得点であることには、母親役割の消極的・否定的受容が最も強く関連し、次に第1子であることであった。4）パス解析によりこれらの変数間の因果関係を分析し、「母親役割への心理的適応モデル」として提示した。

キーワード：母親、母親役割、育児ストレス、1歳6か月児

Ⅰ．はじめに

わが国では、乳幼児をもつ母親の9割が「育児が辛いと思うことがある」とする調査報告があり（大日向, 1997）、育児に苛立ちや困難さを覚える母親の増加とともに育児ストレスに関心が向けられてきている。育児に関連する親の心理的な問題は、わが国では育児不安に着目して報告されてきた（牧野, 1982；川井　他, 1994, 1995）。川井ら（2000）は、育児不安の概念を明確にする一連の研究から、育児不安の本態は「心性からなる育児困難感」であるとの結論を得ている。この育児困難感は、育児への自信のなさ、母親としての不適格感のほか、1歳児以上の子どもをもつ母親では、焦燥感や怒りを抑制できず、子どもへのネガティブな感情や攻撃・衝動性が構成要素であると報告されている。また田中（1997）は、日常的な軽微な混乱（daily hassles）の累積がストレス源として評価されるという心理的ストレス理論に基づいて、育児不安尺度の再構成を試みている。このように、乳幼児を養育する母親においては、単なる育児への心配にとどまらない負担感が増大していることが注目され

*東北大学大学院教育学研究科後期課程
**東北大学大学院教育学研究科・教授

る。

Abidin（1990）は、dysfunctional parentingを構成している変数を探り、親役割を果たすことが難しい子どものタイプを見る側面と親機能のストレスを見る側面の2つで構成した育児ストレス尺度（Parenting Stress Index）を開発した。奈良間ら（1999）は、日本版PSIを作成し、日本における乳幼児の母親の育児ストレスの特徴を報告している。

さらにAbidin（1992）は育児行動モデルを示し、親の特徴、職業、環境、夫婦関係、日常の軽微な混乱（daily hassles）、ライフイベント、子どもの特徴は、parenting role relevance（親役割の適切さ）という自己評価を介して育児ストレスに影響するとしている。そして育児ストレスは直接的に、あるいは資源（ソーシャルサポート、育児仲間、育児能力、物質的資源、情緒的コーピング）を介して育児行動に影響するとした。このように育児行動をとるうえでは、親としての自己認知が要となることを示している。

一方、近年の女性を取りまく社会環境は、ライフサイクルの変化、高学歴化、就労率の増加などによって大きく変化し、女性の生き方や価値観も多様化してきた。女性は母親としての役割をどのように認知し、母親としての自己を捉え、母親役割を引き受けることに適応していくのだろうか。育児期の女性の自己概念について山崎（1997）は、女性は「母親としての自己」と「母親以外としての自己」との二つの自己の充実を望んでおり、「母親として以外の自己」の充実を受容しない家族と生活する女性には葛藤が生じていると報告している。自己の生き方への理想、夫や子どもへの期待、家族から向けられる期待等と現実との不適合からくる葛藤が、乳幼児をもつ母親のイライラ感、抑うつ感情、自己効力感の低下などに繋がり、母親役割への不適応に関連しているとも考えられる。

そこで、本研究では母親役割への心理的適応に焦点を当てて、母親としての自己認知、夫への役割期待、母親役割受容などが育児ストレスとどのように関連しているかを明らかにすることを目的とした。乳幼児をもつ母親のなかでも、歩行をはじめとする運動機能や社会性の発達が著しく、自我が芽生えて自己主張が始まるといわれる1歳6か月児をもつ母親を対象として調査を実施した。

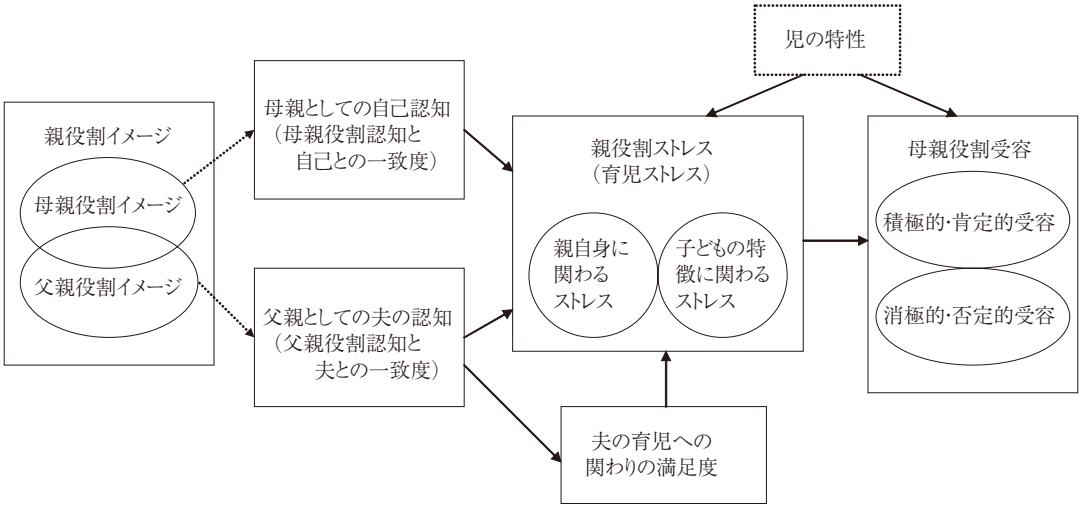
Ⅱ．研究方法

1. 概念枠組み

本研究の概念枠組みを図1に示す。

母親役割獲得に関わる主体である母親は、母親役割認知（母親役割イメージ）に自己を適合させながら役割を遂行していく。役割認知と母親としての自己との適合感（母親役割イメージと自己との一致度）は、母親役割を遂行する際に感じる緊張や葛藤としての親役割ストレス（育児ストレス）に影響を与え、また母親役割を受容する意識に影響する。一方、父親役割認知（父親役割イメージ）は役割期待を含んで認知され、役割認知と父親としての夫との適合感（父親役割イメージと夫との一致度）は、育児ストレスに直接的に影響し、また夫の育児への関わりの満足感を介して育児ストレスに影響する。これらの育児ストレスは、母親役割受容に対する意識に影響を与える。さらに、育児ストレスと母親役割受容に対する意識は児の特性に影響されると考えられる。

図1　母親役割への心理的適応の概念枠組み



2.　調査対象・方法・期間

宮城県Ｓ市の保健福祉センター５施設の協力を得て、1歳6か月健康診査における集団保健教育の後、あるいは個別指導の待ち時間に、調査の主旨と方法を説明し、調査協力に承諾が得られた346名の母親へ質問紙を手渡した。倫理的配慮として、研究への協力は自由意思であり、質問紙は無記名で、統計処理によって個人が特定されることはないことを明記した。質問紙は自宅で記入し、返信用の封筒にて約1週間で郵送による回収を行った。調査期間は、2000年9月21日から10月5日までとした。

3.　調査内容

調査項目は、①背景（母親の年齢・職業・最終学歴・健康状態、児の月齢・性別・出生時体重・出生順位・健康状態、家族構成、家族員の続柄・性別・年齢・健康状態）、②イメージする母親役割及び自己との一致度、③イメージする父親役割及び夫との一致度、④夫の育児への関わりの満足度、⑤育児ストレス、⑥母親役割受容に対する意識とした。②～⑥の測定用具を以下に示す。

1)　母親役割イメージ・父親役割イメージと自己・夫との一致度

母親役割イメージについては、仁平ら（1994）の「母親が備えていなければならない条件」の調査結果を参考に、「愛する親（例：愛情、やさしい）」、「ステレオタイプ的親（例：女（男）らしい、献身的、経済力がある、家庭を守る）」、「健康な親（例：明るさ、つよさ、健康）」、「養育的親（例：母（父）としての自覚、子への関心、責任感）」、「開かれた親（例：教養、広い視野に立つ、社会参加）」の5カテゴリーを満たすような45項目に、「その他」を含めて46項目の選択肢を作成した。この中から、「母親が備えていなければならない大切な条件」、「父親が備えていなければならない大切な条件」を5項目ずつ選択することにした。また、役割イメージと自己および夫との一致度は、「一致する」、「だいたい一致する」、「どちらともいえない」、「あまり一致しない」、「一致しない」の5段階評定（5点

～1点）とした。

2）　夫の育児への関わりの満足度

夫の父親としての育児への関わりに満足しているかについて、「満足している」、「どちらかというと満足」、「どちらともいえない」、「どちらかというと不満」、「不満である」の5段階評定（5点～1点）とした。

3）　育児ストレス

母親の育児ストレスは、原版Parenting Stress Indexの出版社（Psychological　Assessment Resources社）と日本版PSIの開発者（奈良間，兼松ら，1999）に使用許可を得て、日本版Parenting Stress Indexを用いた。「子どもの特徴に関わるストレス」は、7下位尺度、38項目、「親自身に関わるストレス」は、8下位尺度、40項目であり、それぞれの尺度について信頼性・妥当性が検討されている。各項目は、「全くそのとおり」5点、から「全く違う」1点までの5段階評価で、得点が高いことはストレスが高いことを意味する。日本版PSIのCronbach α係数は、質問紙全体が0.94、「子どもの特徴に関わるストレス」が0.90、「親自身に関わるストレス」が0.92、下位尺度のα係数は0.64から0.86の範囲である。

4）　母親役割受容に対する意識

大日向（1988）の母性意識尺度を使用した。この尺度は、自分自身が母親であることを肯定的にとらえる意識と否定的にとらえる意識の2側面を測定するものである。「母親役割に対する積極的・肯定的受容の尺度」であるMP6項目と、「母親役割に対する消極的・否定的受容の尺度」であるMN6項目の計12項目で測定する。各項目の内容に対して、「そのとおりである」4点から「違う」1点の4段階評定である。信頼性係数は記載されていないが、MP尺度の構成概念妥当性、MN尺度の基準関連妥当性が確認されている。

4．　分析方法

統計解析には、SPSSver.11.0を用いた。2群間の数値データの比較にはt検定を用い、3群間の比較では一元配置分散分析により群間に有意差が見られた場合には、Bonferroni法による多重比較検定を行った。また、名義尺度の有意差の分析にはχ^2検定を行い、間隔尺度データ間の関係はPearsonの相関係数を求めた。また、育児ストレス得点を従属変数として重回帰分析を行った後、逐次重回帰分析及びAmosによるパス解析を行った。

Ⅲ．研究結果

質問紙は200部が回収され（回収率57.8％）、そのすべてを分析対象とした。

1．　対象者の背景

母親の平均年齢（SD）は31.3（4.3）歳（範囲：21 ～ 42）であった。子どもの月齢は18か月児が175名（87.5％）と最多で（範囲：17 ～ 21）、出生順位は第1子が115名（57.5％）、第2子以降85名（42.5％）であり、男児が60.0％と多かった。有職者（非常勤を含む）は18.0％であり、最終学歴は高校卒業が

表1　対象者の背景

n = 200

母親の年齢	31.3 ± 4.3 歳	（21 ～ 42歳）	
夫の年齢	33.5 ± 5.5 歳	（21 ～ 53歳）	
母親の職業	専業主婦	164名	(82.0)（%）
	常勤・自営業	27	(13.5)
	非常勤	9	(4.5)
母親の最終学歴	中学校	6	(3.0)
	高等学校	69	(34.5)
	専門学校	46	(23.0)
	短大・大学・大学院	77	(38.5)
子どもの月齢	17か月	17	(8.5)
	18か月	175	(87.5)
	19か月	5	(2.5)
	20か月	2	(1.0)
	21か月	1	(0.5)
子どもの性別	男	120	(60.0)
	女	80	(40.0)
子どもの出生順位	第1子	115	(57.5)
	第2子	60	(30.0)
	第3子	25	(12.5)
家族形態	核家族	172	(86.0)
	拡大家族	28	(14.0)

69名（34.5%）と最も多かった。核家族が86.0%を占めた（表1）。

2.　親役割イメージと自己・夫との一致度

母親役割イメージについての5項目選択では、「愛情」をあげたものが168名（84.0%）と最も多く、次いで「健康」（53.5%）、「子どもの気持ちの理解」と「笑顔」（34.0%）、「しつけ」（30.0%）の順に続いた（図2）。父親役割イメージの5項目選択では、「愛情」（66.3%）、「健康」（51.4%）は母親役割イメージと同様であったが、次いで「包容力」（42.0%）、「経済力がある」（35.9%）、「家庭を守る」（34.8%）と続いた（図3）。

これらの役割イメージと、母親としての自己との一致については、「どちらともいえない」が87名（43.5%）と最も多く、「だいたい一致する」（37.0%）、「あまり一致しない」（18.0%）であり、「一致しない」ものは3名（1.5%）で、「一致する」と回答したものはいなかった。一方、母親がもつ父親役割イメージと、実際に夫がどの程度一致しているかは、「だいたい一致する」97名（54.2%）、「一致する」17名（9.5%）であり、一致するものが半数以上であった（図4）。

3.　夫の育児への関わりの満足度と関連要因

夫の育児への関わりの満足度は、「どちらかというと満足」が73名（41.0%）と最多で、「満足している」ものは38名（21.3%）であった。父親役割イメージと夫との一致度と、夫の育児への関わりの満足度との間に、中等度の正の相関が認められた（$r = .554$, $p < .001$）。

図2　母親役割イメージ

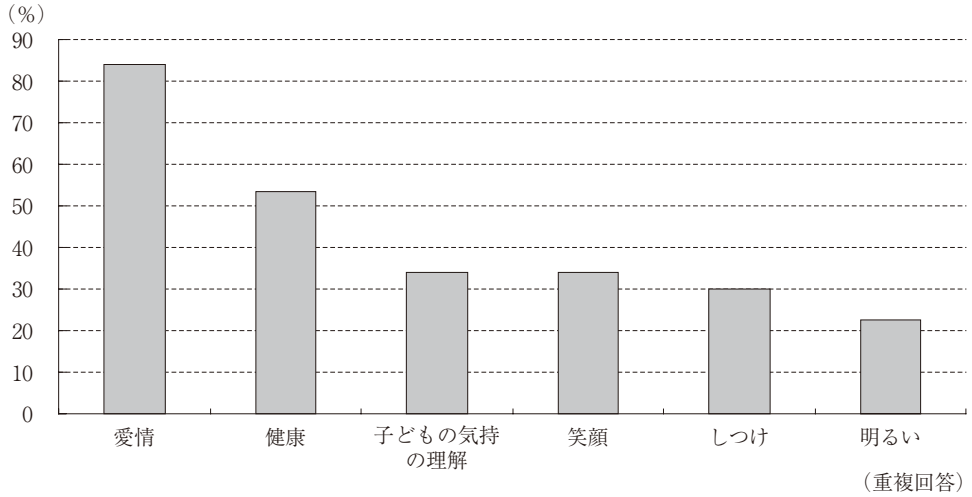


図3　父親役割イメージ

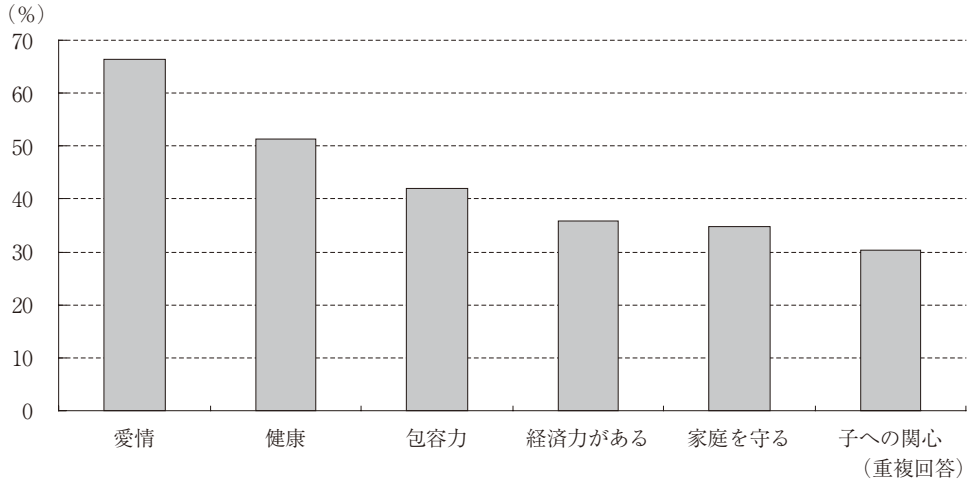
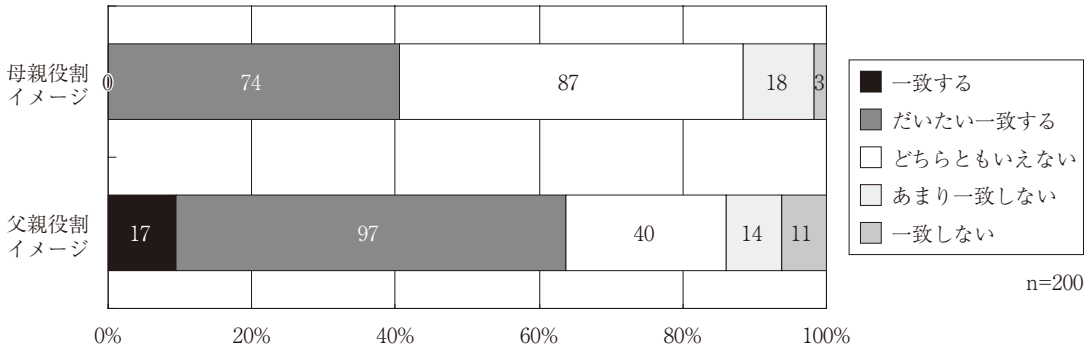


図4　親役割イメージと自己・夫との一致度



4.　育児ストレスと関連要因

1)　育児ストレス総点と関連要因

育児ストレス総点の平均得点（SD）は、190.7（31.7）点（範囲：114 ～ 270）であった。育児ストレス総点と児の性別、出生順位（第1子、第2子以降）、異常の有無との関連を検討した結果、男児（196.6 ± 31.3）が女児（182.4 ± 30.5）に比して有意に高値（$t = 2.96$, $p < .005$）であり、第1子（195.4 ± 31.7）は第2子以降（184.7 ± 30.9）より有意に高値（$t = 2.22$, $p < .05$）であった。母親の特性や家族形態との関連は認められなかった。

2)　「親自身に関わるストレス」と関連要因

「親自身に関わるストレス」の平均得点（SD）は、106.8（20.4）点（範囲：65 ～ 156）であり、下位尺度は「親役割によって生じる規制」22.8（5.3）、「社会的孤立」16.4（5.2）、「夫との関係」12.5（4.4）、「親としての有能さ」21.6（3.7）、「抑うつ・罪悪感」9.9（3.1）、「退院後の気落ち」9.7（3.5）、「子どもに愛着を感じにくい」6.4（2.1）、「健康状態」7.1（2.7）であった。

親自身に関わるストレス合計と下位尺度について、母親の特性との関連を検討するため、母親の年齢2群（30歳以上、30歳未満）、職業の有無、最終学歴3群（中・高卒、専門学校・短大卒、大学・大学院卒）、家族形態2群（核家族、拡大家族）、健康状態（健康、健康問題あり）による違いをみたが、いずれにも有意差は認められなかった。

親自身に関わるストレス合計得点と児の性別、出生順位（第1子、第2子以降）、異常の有無との関連を検討した結果、児の性別において差がみられ、ストレス合計得点（$t = 2.68$、$p < .01$）と「親としての有能さ」（$t = 2.24$、$p < .05$）、「抑鬱・罪悪感」（$t = 2.50$、$p < .05$）、「退院後の気落ち」（$t = 2.44$、$p < .05$）、「子どもに愛着を感じにくい」（$t = 3.21$、$p < .01$）の下位尺度において、いずれも男児が女児より有意に高値を示した。出生順位では、合計得点に差はないものの、第1子では第2子以降より「退院後の気落ち」（$t = 5.04$、$p < .001$）でストレス得点が高かった（表2）。

表2　児の性別・出生順位による「親自身に関わるストレス」

平均値（SD）

	男児	女児	第1子	第2子以降
	（n = 119）	（n = 80）	（n = 115）	（n = 84）
親自身に関わるストレス合計	110.1（20.5）	102.2（19.3）**	108.5（21.1）	104.7（19.2）
親役割によって生じる規制	23.2（5.3）	22.1（5.4）	23.3（5.4）	22.1（5.1）
社会的孤立	16.5（5.4）	16.3（5.0）	16.4（5.2）	16.4（5.2）
夫との関係	12.6（4.3）	12.4（4.5）	12.3（4.4）	12.8（4.3）
親としての有能さ	22.1（3.7）	20.9（3.6）*	21.8（3.8）	21.4（3.4）
抑鬱・罪悪感	10.3（3.2）	9.2（2.9）*	9.8（3.4）	9.9（2.8）
退院後の気落ち	10.2（3.7）	9.0（3.2）*	10.7（3.5）	8.3（3.1）***
子どもに愛着を感じにくい	6.8（2.1）	5.8（2.0）**	6.3（2.1）	6.5（2.0）
健康状態	7.4（2.8）	6.8（2.6）	7.4（2.8）	6.8（2.6）

* $p < .05$　** $p < .01$　*** $p < .001$

3) 「子どもの特徴に関わるストレス」と関連要因

「子どもの特徴に関わるストレス」の平均得点(SD)は、84.1(16.6)点(範囲:47 ～ 142)であり、下位尺度は「親を喜ばせる反応が少ない」12.4(3.9)、「子どもの機嫌の悪さ」17.1(4.5)、「子どもが期待通りにいかない」9.7(3.5)、「子どもの気が散りやすい／多動」15.1(3.8)、「親につきまとう／人に慣れにくい」12.9(3.6)、「子どもに問題を感じること」8.4(2.7)、「刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい」9.0(2.6)であった。

「子どもの特徴に関わるストレス」合計得点と児の性別、出生順位(第1子、第2子以降)、異常の有無との関連を検討した結果、児の性別と出生順位において違いがみられた。

男児におけるストレス合計の平均得点(SD)は86.3(16.7)であり、女児の80.9(16.2)に比して有意に高値であった($t = 2.17$、$p < .05$)。下位尺度で有意差が認められたのは、「子どもが期待通りにいかない」($t = 3.23$、$p < .01$)、「子どもに問題を感じること」($t = 2.25$、$p < .05$)であった。また、第1子のストレス合計の平均得点(SD)は87.3(16.2)であり、第2子以降の79.9(16.3)に比較して有意に高く($t = 2.99$、$p < .005$)、5つの下位尺度である「子どもの機嫌の悪さ」($t = 2.87$、$p < .01$)、「刺激に敏感に反応する／ものに慣れにくい」($t = 2.71$、$p < .01$)、「子どもの気が散りやすい／多動」($t = 2.53$、$p < .05$)、「親につきまとう／人に慣れにくい」($t = 2.47$、$p < .05$)、「子どもに問題を感じること」($t = 2.23$、$p < .05$)において有意差がみられた(表3)。

表3　児の性別・出生順位による「子どもの特徴に関わるストレス」

平均値(SD)

	男　児	女　児	第1子	第2子以降
	(n = 118)	(n = 80)	(n = 113)	(n = 85)
子どもの特徴に関わるストレス合計	86.3(16.7)	80.9(16.2)*	87.3(16.2)	79.9(16.3)**
親を喜ばせる反応が少ない	12.8(3.9)	11.8(3.9)	12.4(3.8)	12.4(4.1)
子どもの機嫌の悪さ	17.4(4.5)	16.6(4.5)	17.9(4.6)	16.1(4.1)**
子どもが期待通りにいかない	10.4(3.5)	8.8(3.3)**	10.1(3.6)	9.2(3.2)
子どもの気が散りやすい／多動	15.1(3.7)	15.1(3.8)	15.6(3.8)	14.3(3.6)*
親につきまとう／人に慣れにくい	12.9(3.6)	12.9(3.7)	13.5(3.8)	12.2(3.2)*
子どもに問題を感じること	8.7(2.7)	7.8(2.5)*	8.7(2.6)	7.9(2.8)*
刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい	9.0(2.8)	9.0(2.2)	9.4(2.6)	8.4(2.4)**

* $p < .05$　** $p < .01$

5.　母親役割受容に対する意識と関連要因

MP尺度得点の平均値(SD)は2.84(0.54)、MN尺度得点の平均値(SD)は2.16(0.52)であり、母親役割の受容に対する意識は、否定的・消極的であるよりは肯定的・積極的な傾向であることが示された。

母親の特性(年齢、職業、最終学歴、家族形態、健康)との関連では、唯一MN尺度において職業の有無による違いがみられ、専業主婦は有職者より高値を示し($t = 2.57$、$p < .05$)、「自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる」($t = 2.94$、$p < .005$)、「育児に携わっているあいだに、

表4　母親役割イメージと自己との一致度によるMP尺度・MN尺度

自己との一致度 ＼ MP・MN尺度		一致する (n=74)		どちらともいえない (n=87)		一致しない (n = 39)	
MP尺度（MEAN SD）		3.05	.50	2.83*	.48	2.49*	.55
MP項目	母親であることが好きである	3.50	.69	3.28*	.71	2.77*	1.01
	母親になったことで人間的に成長できた	3.46	.74	3.36	.65	3.23	.90
	母親としてふるまっているときが一番自分らしいと思う	2.26	.71	2.15*	.72	1.77*	.63
	母親であることに生きがいを感じている	2.95	.86	2.62*	.81	2.31	1.00
	母親になったことで気持ちが安定して落ち着いた	2.95	.79	2.74*	.77	2.28*	.83
	母親であることに充実感を感じる	3.12	.78	2.82*	.67	2.59	.79
MN尺度（MEAN SD）		1.95	.45	2.24*	.50	2.37	.58
MN項目	子どもを育てることが負担に感じられる	1.61	.77	1.92*	.78	2.15	1.04
	育児に携わっているあいだに、世の中から取り残されていくように思う	2.08	1.02	2.43	.95	2.46	.97
	自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる	2.11	.88	2.30	.94	2.44	.94
	自分は母親として不適格なのではないだろうか	1.73	.67	2.40*	.71	2.67	.96
	子どもを産まないほうが良かった	1.05	.37	1.22*	.47	1.36	.71
	母親であるために自分の行動がかなり制限されている	3.18	.67	3.26	.74	3.13	.77

Bonferroni法による多重比較；　* $p < .05$

世の中から取り残されていくように思う」（$t = 2.29$、$p < .05$）が有意に高値であった。児の特性との関連は認められなかった。

母親役割イメージと自己との一致度とMP尺度得点との関連は、弱い正の相関が認められ（$r = .364$、$p < .001$）、MN尺度得点とは弱い負の相関がみられた（$r = -.324$、$p < .001$）。すなわち、一致するほど肯定的・積極的、一致しないほど否定的・消極的な受容である傾向がみられた。母親役割イメージと母親としての自己との一致度を「一致する」、「どちらともいえない」、「一致しない」の3群に分けて、MP・MN尺度得点、MP・MN項目の評定値との関係を検討した（表4）。MP項目では「母親になったことで人間的に成長できた」の1項目を除いた4項目で、「一致しない」群に比較して「一致する」群が有意に高値であった。とくに一致する母親では「母親であることに充実感を感じる」ことが示された。MN項目においては、「子どもを育てることが負担に感じられる」、「自分は母親として不適格なのではないだろうか」、「子どもを産まないほうが良かった」の項目で、「一致しない」群のほうが有意に高値を示した。

夫の育児への関わりの満足度とMP尺度得点との間には、ほとんど関連はなかったが、MN尺度得点との間には弱い負の相関がみられ（$r = -.211$、$p < .01$）、満足度が低いほど否定的・消極的な受容であった。

6. 育児ストレスに関する重回帰分析

1) 「親自身に関わるストレス」に関する逐次重回帰分析

親自身に関わるストレス合計得点を従属変数として逐次重回帰分析を行った結果、標準偏回帰係数が有意であった変数は選出順にMN尺度、夫の育児への関わりの満足度、母親役割イメージと自己との一致度、児の出生順位であり、最終ステップのR^2値は0.571（$p < .05$）であった（表5）。これより、親自身に関わるストレスが高得点であることには、母親役割に対する消極的・否定的受容が最も強く関連し、次に夫の育児への関わりが不満であること、母親役割イメージが自己と一致しないこと、第1子であることが関連することがわかった。

2) 「子どもの特徴に関わるストレス」に関する逐次重回帰分析

子どもの特徴に関わるストレスを従属変数として逐次重回帰分析を行った結果、選出順にMN尺度、出生順位であり、このときのR^2値は0.193（$p < .05$）であった（表6）。つまり、母親役割に対する消極的・否定的受容の意識と第1子であることが子どもの特徴に関わるストレスが高得点であることと関連していることが示された。

表5 「親自身に関わるストレス」に関する逐次重回帰分析

n = 190

変数（選択順）	β	t	p	累積 R^2
MN尺度評定値	.599	10.747	< .001	.503
夫の育児への関わりの満足度	-.206	-3.830	< .001	.545
母親役割イメージと自己との一致度	-.160	-2.896	< .01	.560
児の出生順位	-.119	-2.296	< .05	.571

表中β値は、最終段階の値

表6 「子どもの特徴に関わるストレス」に関する逐次重回帰分析

n = 177

変数（選択順）	β	t	p	累積 R^2
MN尺度評定値	.402	5.452	< .001	.171
出生順位	-.165	-2.243	< .05	.193

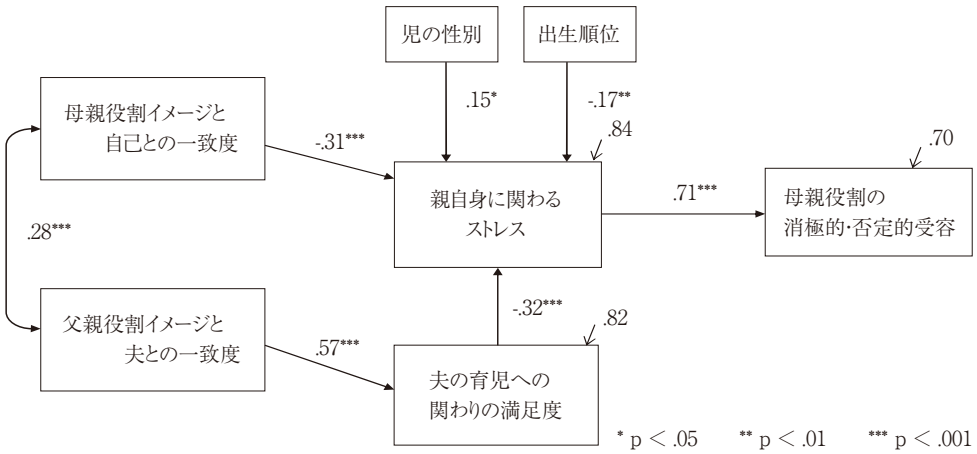
表中β値は、最終段階の値

7. 母親役割への心理的適応モデルの検討

1歳6か月児をもつ母親の心理的適応モデルを検討するために、図1で示した概念枠組みと分析結果に従ってパスモデルを作成し解析を行った。このモデルは母親自身の心理に焦点を当て、育児ストレス尺度においては「親自身に関するストレス」を内生変数とした。その他の内生変数は、夫の育児への関わりの満足度、MP尺度、MN尺度とした。また、母親役割イメージと自己との一致度、父親役割イメージと夫との一致度、児の性別と出生順位を外生変数として解析した。この結果としてのパス・ダイアグラムは図5に示した。このモデルの適合度指標は、$\chi^2 = 10.896$、$df = 14$、$p = .694$、RMSEA = .000、NFI = .996、CFI = 1.000で、当てはまりがよく採用できると判断された。

このモデルからは、次のような結果が説明できる。母親役割イメージと自己とが一致しないもの

図5　母親役割への心理的適応モデル　―1歳6か月―



は親自身に関わるストレスを高めるように影響し、父親役割イメージと夫とが一致しないものは夫の育児への関わりの満足感を低め、満足感が低いことは親自身に関わるストレスを高める。児が男児であることと第1子であることがストレスを高めるように影響し、親自身に関わるストレスは母親役割の消極的・否定的受容に強く影響する。

Ⅳ．考察

1.　育児ストレスと関連要因

本調査では、育児ストレス総点の平均値（SD）が190.7（31.7）、「親自身に関わるストレス」が106.8（20.4）「子どもの特徴に関わるストレス」が84.1（16.6）であった。宮城県における0～3歳児の母親の育児ストレス状況を日本版PSIによって調査した報告（白畑, 1997）によると、1歳児の母親189名では、それぞれ194.8（31.8）、106.9（20.2）、87.9（15.3）と報告されており、今回の調査では「子どもの特徴に関わるストレス」がやや低いものの同程度であると判断される。

1）　親自身に関わるストレスと関連要因

「親自身に関わるストレス」は、親機能のストレスを見る側面として開発されており、Abidin（1992）は親としての自己認知が育児ストレスに影響するとしていることから、親の役割認知や役割受容との関連を中心に分析した。役割認知（role cognition）は、役割取得に関わる主体の認識的・評価的過程を捉える概念の1つであり、他者（社会）の側からの役割期待に対して、主体の側で作り上げている役割のイメージで役割の獲得に影響するものである。母親自身がもつ母親役割イメージを「母親が備えていなければならない条件」という問いかけで、多くの選択肢から選ぶ方法を試みた。これは、性別や養育経験による母性観の深化をみた仁平ら（1994）の研究を参考にしたものである。「愛情」が最も多く選択されたが、第2位には「健康」が選択された。仁平らは、子育て経験により「養育する母」から「健康な母」へ母性観が変化することを認め、これを“母性観の深化”としている。親になることで、健康が親の大切な条件と考える現れとして、仁平らの結果を支持するものであった。

親イメージは2位まで父母ともに同じであったが、母親イメージは第3位から「子どもの気持ちの理解」、「笑顔」、「しつけ」である一方、父親役割イメージは、「包容力」、「経済力がある」、「家庭を守る」の順に選択しており、調査対象である平均年齢31.3歳の女性においても伝統的な父親観・母親観が強いといえる。母親役割イメージと自己との一致については、「どちらともいえない」とするものが半数近くを占め、「一致する」ものはいなかった。しかし、父親役割イメージと夫との一致は、一致すると認識する母親が6割以上であり、母親としての自己評価が厳しい傾向であった。

「親役割に関わるストレス」を従属変数とした逐次重回帰分析では、MN尺度評定値すなわち母親役割受容が消極的・否定的受容であることと最も強く関連し、次に夫の育児への関わりの不満であり、母親役割イメージが自己と一致しないことが第3位の変数として選出された。ストレスと役割受容との強い関連は容易に推測されるが、母親役割イメージと母親としての自己との一致度が、親自身に関わるストレスに大きく影響していることが明確に示されたことは、本研究において注目される結果である。この母親役割と自己との一致度は、母親役割受容の意識にも直接的に関連していた。一致していると思う母親は「母親であることに充実感を感じる」ことが示され、一致しない母親は「自分は母親として不適格なのではないだろうか」と思う傾向があり、一致しない母親ほど育児ストレスが高いことが示された。Mercer（1985）の母親役割理論によると、役割獲得の最終段階であるMaternal Identityの確立では、調和・信頼・適格という感情を経験するとされる。このことから、役割認知と自己の適合感覚が役割獲得過程には大きな影響力をもつと考えられる。またMercerら（1995）は、母親能力を主として予測する変数として自尊心（self-esteem）を見出しており、Tarkkaら（2000）は、8か月児の母親における養育の対処能力に影響する重要な変数として、母親能力、子どもへのアッタチメントとともに母親の自己概念であることを報告している。清水ら（2000）は、乳幼児の母親の因子分析による育児ストレス構造の研究によって、8構造の1つとして「アイデンティティー喪失に対する脅威」を見出し、末子の年齢が低い専業主婦に高い傾向がみられるとしている。今回の調査においても、専業主婦は有職のものに比べて消極的・否定的受容尺度の得点が高く、とくに「育児に携わっているあいだに、世の中から取り残されていくように思う」、「自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる」と感じる傾向が示された。1歳6か月児の母親は、職業をもつものは仕事復帰を果たしている時期にあり、専業主婦では、幼児を伴っての社会的活動が難しいことから、子育てによって自分の能力が阻害されている意識を強めると考えられる。このように、母親としての自己認知は、母親役割獲得における心理過程の重要な要素であると考えられ、育児期の女性の自己概念については今後さらに検討していきたい。

今回の調査では、母親役割受容はMP尺度2.84 ± 0.54、MN尺度2.16 ± 0.52であり、全般的傾向としては消極的・否定的に受容するより、積極的・肯定的に受容する意識が高いといえる。大日向（1988）による1977年～1978年に幼児から高校生の子どもをもつ母親についての調査結果（MP尺度3.030 ± 0.598、MN尺度1.934 ± 0.585）との比較では、今回は受容の意識が低い傾向であった。項目ごとにみると、MP尺度では「母親であることに生きがいを感じている」、「母親になったことで気持ちが安定して落ち着いた」がとくに低値であり、MN尺度では「育児に携わっているあいだに、

世の中から取り残されていくように思う」、「母親であるために自分の行動がかなり制限されている」という意識が高くなっていることが注目される。大日向（1994）は、1993年に行った育児意識調査から、1970 ～ 1980年代初めの育児ノイローゼの母親にはみられない現象として、夫婦関係の荒廃、子ども観の未成熟さ、子どもを育てることへの自覚の欠如、母親自身の未成熟さが著しい母親のタイプが目立つことを指摘している。消極的・否定的受容の増加は、このような現象を示すと捉えることもできる。近年アメリカでは、単に子育てに必要なスキルや知識の習得に留まらず、人間の共感性や養護性を育むことを目的にしたペアレンティングプログラムが導入されている（藤後, 2005）。日本においても親になる以前からの教育的支援が今後の課題と考えられる。

また、育児期のソーシャル・サポートとして夫が重要な存在であることは周知のことであるが、母親の育児ストレスに夫の育児への関わりの満足度が大きく影響することが明らかに示された。尾形ら（1999）は、父親の家庭での協力的関わりを構成する「夫婦間のコミュニケーション」が、母親の精神的ストレスである「集中力の欠如」、「孤立感」、「自己閉塞感」と有意に関連することを認め、夫婦間のコミュニケーションに基づく相互理解が妻の精神的ストレス軽減の重要な要因となるとしている。

「親自身に関わるストレス」と児の特性との関係では、児の性別によってストレスの程度に違いが認められた。ストレス合計のほか、「退院後の気落ち」、「親としての有能さ」、「抑鬱・罪悪感」、「子どもに愛着を感じにくい」の4つの下位尺度で男児にストレスが高値であった。これは、後述する「子どもの特徴に関わるストレス」において、男児が女児に比してストレスが高いことに関連していると考えられ、男児では「子どもが期待通りにいかない」、「子どもに問題を感じること」の下位尺度が高値である。1歳6か月児は、運動が活発になり好奇心が旺盛で、行動範囲が広がって目が離せない時期である。また、自己主張がはっきりして反抗的と感じる態度に出ることもあるという特徴がある。しかし、単純に「機嫌の悪さ」、「多動」、「刺激に敏感に反応」などのストレス下位尺度には、性別の違いは認められていない。男児に対し女児とは異なる期待があり、期待通りではないことへの問題意識が、愛着の感じにくさや罪悪感といった親自身のストレスに影響することが示唆され、性別とストレスとの関連はさらに今後の検討としたい。また、第1子すなわち初産婦では「退院後の気落ち」でのストレス得点が高かった。産褥早期におけるマタニティ・ブルーズは初産婦に高率であることが広く認められており、家事・育児の心配、心身疲労、抑うつ気分が経産婦に比べて有意に高いことも報告されている（丸山, 1999）。

2）　子どもの特徴に関わるストレスと関連要因

「子どもの特徴に関わるストレス」は、親役割を果たすことが難しい子どものタイプを見る側面から開発された。子どもの特徴に関わるストレスに影響する要因は、児の性別と、出生順位であった。とくに、出生順位は、逐次重回帰分析によってMN尺度の次に選択された。第1子の母親は、第2子以降の母親より、7下位尺度中の5下位尺度である「子どもの機嫌の悪さ」、「子どもの気が散りやすい／多動」、「親につきまとう／人に慣れにくい」、「子どもに問題を感じること」、「刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい」においてストレスが高く、初めての育児経験の中で子どもの反応に戸

惑っているようすが明らかである。Mercer ら（1995）は、経験ある母親（経産婦）と未経験の母親（初産婦）の母親能力（maternal competence）について産後8か月まで縦断的に比較しているが、2グループに違いはないと報告している。ここでいう母親能力は、「育児している親に要求される状況にあった親の認識能力」とされる。川井ら（2000）は、0 ～ 11か月児の母親と1歳児以上の母親の育児困難感の違いを見出しており、1歳以上では子どもに対するネガティブな感情や攻撃・衝動性が特徴的と報告している。このように、乳児期に比較して幼児期では子どもの機嫌や要求への対処が難しい局面が多くなり、子どものコントロールには育児経験が大きく影響すると考えられる。今後の子育て支援においては、サービス内容や対象者が多様である地域支援型のほか、対象のニーズを重視し、焦点化したアプローチを取り入れたプログラムが必要と思われる。

2. 母親役割への心理的適応モデル

最後に、1歳6か月児における母親役割への心理的適応モデルを検討するために、概念枠組みと分析から得られた結果からパス解析を行い、適合度指標から当てはまりのよいモデルを提示した。とくに「親自身に関わるストレス」が母親役割を消極的・否定的に受容する意識に強く関連することが明らかにされたことは、親機能を果たすストレスがどこに起因しているかを探り、対処できるような働きかけが重要といえる。PSI スコアの変化を分析して面接などの継続的な援助の試みに関する報告（遠藤ら, 2000）もあるように、下位尺度得点の分析からストレスの原因を検討することにより、個人への支援計画や介入効果の評価に利用できると考える。

また、「母親役割イメージと自己との一致度」が親自身に関わるストレスに影響し、また「父親役割イメージと夫との一致度」が「夫の育児への関わりの満足感」に強く関連し、間接的にストレスに影響していることから、母親役割への心理的適応を促すためには、親役割イメージと実際の親としての自己および夫との調和をはかることが効果的と思われる。それには、親としての自己、親として以外の自己についての認識や感情を表出する機会をつくり、夫婦間で話し合うことが大切ではないかと考える。一方、児が男児であること、第1子であることが親自身のストレスを高めることが示された。1歳6か月児における歩行、言語をはじめとする飛躍的発達とその個人差が、男児では「子どもが期待通りにいかない」、「子どもに問題を感じる」と捉え、第1子では「機嫌の悪さ」、「刺激に過敏に反応／ものに慣れにくい」と捉えることで、親自身に関わるストレスに繋がることが示唆された。これらから、第1子の母親やこのような特徴が現れやすい男児の母親については、子どもの発達に関する理解を助け、気質に合わせた対処能力を高めるような支援が重要であると考えられた。

しかし適応モデルは、1歳6か月をもつ母親に限定した調査であり、対象者は地方都市に居住する集団で、有効回答が6割に満たない200名という人数であるため、モデルの一般化には限界がある。児の特性との関連の分析も十分ではない。母親の心理的適応を支援する介入のためには、子どもの年齢に応じた変化など、子ども側の要因を含めた検討が今後さらに必要であると考える。

Ⅴ．結論

1歳6か月児をもつ母親の育児ストレスとその関連要因を明らかにすることを目的として、18か月児健診に訪れた母親346名を対象として日本版 Parenting Stress Index を使用した質問紙調査を行った。有効回答200（57.8％）について分析し、以下の結果を得た。

1．育児ストレス総点の平均得点（SD）は190.7 ± 31.7点であり、女児に比較して男児の母親が高値であり、第2子以降に比して第1子の母親が有意に高値を示した。

2．「親自身に関わるストレス」には児の性別が関連し、男児をもつ母親のストレス得点が有意に高かった。

3．「親自身に関わるストレス」を従属変数として逐次重回帰分析を行った結果、ストレスが高得点であることには、母親役割の消極的・否定的受容が最も強く関連し、次いで夫の育児への関わりに対する不満、母親役割イメージと自己とが一致しないこと、第1子であることであった。

4．「子どもの特徴に関わるストレス」には、児の性別と出生順位が関連し、男児をもつ母親は女児に比して有意にストレス得点が高く、また第1子である母親は第2子以降であるものより高値であった。

5．「子どもの特徴に関わるストレス」を従属変数として逐次重回帰分析を行った結果、ストレスが高得点であることには、母親役割の消極的・否定的受容が最も強く関連し、次に第1子であることであった。

6．パス解析により「母親役割への心理的適応モデル」を示した。すなわち、母親役割イメージと自己との一致度は、親自身に関わるストレスに直接的に影響する。また、父親役割イメージと夫との一致度は、夫の育児への関わりの満足感を介してストレスに影響する。親自身に関わるストレスは、母親役割の消極的・否定的受容に強く影響することを示した。

今後は、子ども側の要因を含めた母親の心理的適応過程を明らかにするとともに、個別的で縦断的な研究によって、高い育児ストレスを示す母親への支援方法を検討していきたい。

【引用文献】

Abidin,R.R.：Parenting Stress Index Manual（PSI）Third Edition，PEDIATRIC PSYCHOLOGY PRESS，1990.

Abidin,R.R.：The determinants of parenting behavior，Journal of clinical child psychology，21(4)，407-412，1992.

遠藤巴子，兼松百合子，横沢せい子　他：健康な1歳児の母親への継続的な援助の過程にみられたPSIスコアの変化の特徴，家族看護学研究，6(1)，2000.

川井　尚，庄司順一，千賀悠子　他：育児不安に関する基礎的研究，日本総合愛育研究所紀要，30，27-39，1994.

川井　尚，庄司順一，千賀悠子　他：育児不安に関する臨床的研究―幼児の母親を対象に―，日本総合愛育研究所紀要，31，27-42，1995.

川井　尚，庄司順一，千賀悠子　他：育児不安に関する臨床的研究Ⅵ―子ども総研式・育児支援質問紙（試案）の臨床的有用性に関する研究―，日本子ども家庭総合研究所紀要，36，117-138，2000.

牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の生活と育児不安，家庭教育研究所紀要，3，34-56，1982.

丸山知子：産褥期女性の心理・社会的リスクを把握するためのスクリーニング用質問紙の開発，心身医学，39(4)，280-286，1999.

Mercer,R.T.：The process of maternal role attainment over the first year，Nursing Research，34(4)，198-204，1985.

Mercer,R.T.，Ferketich,S.L.：Experienced and inexperienced mothers' maternal competence during infancy，Research in Nursing & Health，18，333-343，1995.

奈良間美保，兼松百合子，荒木暁子 他：日本版 Parenting Stress Index（PSI）の信頼性・妥当性の検討，小児保健研究，58(5)，610-616，1999.

仁平義明，村井憲男，大槻静子　他：母性観の深化，平成5年度科学研究費補助金（一般B）研究成果報告書「障害児の母親のための母性確立及び母親支援教育プログラム開発に関する研究」，11-24，1994.

尾形和男，宮下一博：父親の協力的関わりと母親のストレス、子どもの社会性発達および父親の成長，家族心理学研究，13（2），87-102，1999.

大日向雅美：第7章 研究Ⅲ：母性意識の発達変容について，母性の研究，135-169，川島書店，東京，1988.

大日向雅美：母性の発達，季刊 精神科診断学，5(3)，293-301，1994.

大日向雅美：育児ストレス―日本とイギリスを比較して―，こころの科学，73，7-12，1997.

清水嘉子，西田公昭：育児ストレス構造の研究，日本看護研究学会，23(5)，55-67，2000.

白畑範子：宮城県における乳幼児の母親の育児ストレス状況について，公衆衛生情報みやぎ，251，2-8，1997.

田中昭夫：幼児を保育する母親の育児不安に関する研究，乳幼児教育学研究，6，57-64，1997.

Tarkka,M.T.，Paunonen,M.，Laippala,P.：First-time mothers and child care when the child is 8 months old，Journal of Advanced Nursing，31(1)，20-26，2000.

藤後悦子：日米におけるペアレンティングプログラム研究の現状と課題，コミュニティ心理学研究，9(1)，25-40，2005.

山崎あけみ：育児期の家族の中で生活している女性の自己概念―「母親としての自己」・「母親として以外の自己」の分析―，日本看護科学学会誌，17(4)，1-10，1997.

The Parenting Stress Felt by Parents of 18-month-old Children (1)

—Contributing Factors to Mother's Parenting Stress—

Kayoko KUWANA
Toru HOSOKAWA

The purpose of this research was to examine the parenting stress of mothers and the factors contributing to it. Questionnaires were distributed to 346 mothers who had 18-month-old children. The Japanese Parenting Stress Index was used to measure childcare stress. Two-hundred subjects (response rate: 57.8%) were analyzed, which produced the following results. 1) Both sex and birth order of the child were closely associated with total stress scores. Mothers of boys had a significantly higher stress level than mothers of girls, and mothers of first children were under greater stress than mothers of second or later children. 2) A stepwise multiple regression analysis with "Parent Domain Score" as the dependent variable showed that the mother's passive and negative acceptance of her maternal role was most strongly associated with high stress scores, followed in importance by the mother's dissatisfaction with her husband's lack of involvement in child-rearing, the mother's own failure to conform to the maternal role image, and then the mother being the first child. 3) A stepwise multiple regression analysis with "Child Domain Score" as the dependent variable indicated that the mother's passive and negative acceptance of her maternal role had the closest association with high stress scores, with the mother being the first child as the next important factor. 4) Finally, on the basis of a path analysis of our data, we propose a "model of psychological adaptation to the maternal role."

Key Words：mother, maternal role, parenting stress, 18-month-old child